
千年のヒストライズ

来戸 述

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千年のヒストライズ

【Zコード】

Z0816Z

【作者名】

来戸　述

【あらすじ】

英雄に怯える赤毛の少年。自分を偽り続ける王女。己の力を試し
たい青年騎士。野望を胸に秘める海賊の男。悲しみから逃げる魔族
の女性。それぞれの思いが千年の時を越え、ひとつ物語を紡いで
いく。

～001～（前書き）

ファンタジー。とりあえずファンタジー。
なぜファンタジーなのか？そこに幻想が広がっているからだ！
1日1ページの更新を目指に、力の続く限り頑張ります。

【1】

暖かなランプの光を受けて、少女の額で真つ赤なルビーがきらりと輝いた。

少女は化粧台に取り付けられた大きな鏡の前に立ち、目を細めてその輝きを見ていた。

いや、そうではない。少女の虚ろな目は、輝きを映し出す鏡を見ていた。

曇り一つない綺麗な鏡。こんな素晴らしいものをつくるのにいったい何人の職人がいつたいどれだけの時間をかけて磨き上げたのだろう。そして、それにはいつたいいくらのお金がかけられたのだろう。

わたしはそんなお金、少しも払ったことがないのに

少女は額に手をやると、ティアラの傾きを調整した。しつかりと自分を『飾らなければ』いけない。そう教えられて育つた。たった今誰かの首筋を切り裂いて噴き出た鮮血のように紅い宝石を少女の細い指先がそっと撫でた。

こんなわたしでも、一所懸命に飾れば、価値が出てくるのかな何度も繰り返してきた疑問が、少女の脳裏をよぎる。

シェリア・ローズ・ブラッドリー。それが少女の名前だった。

両親が占い師と相談してつけた名前。紅玉の国を象徴するに堪えられる立派な名前。だが、少女はその名前以上の価値を自分自身に見出せたためしがなかつた。

生まれてきて十六年と四ヶ月。少女は『シェリア・ローズ・ブラッドリー』という名前の人形が、もしくは『シェリア姫』の値札がつけられた置物でしかなかつたのだ。

「……ううん、違う」

少女は鏡の前で小さく頭を振つた。

かつて一人だけいたではないか。自分のことをありのままに見てくれた人が。

自分と同じくらいの年頃。背丈。ルビーのように紅い髪の毛。宵闇の中で落とした一本の針を探すよつこ、その人の顔を思い出そうとして。

「駄目ね、わたし……あの子の顔、忘れちゃった……」

おぼろげな記憶は、結局、おぼろげなままだった。

もう一度、あの子に会えれば思い出せるかもしない。でも、そのときわたしはいつたい何を話そうとするのだろう。

本当のわたしって何？

本当のわたしは何を考えて生きてきたの？

本当のわたしってきれいに見える？

本当のわたしじゅや駄目だったの？

鏡に向かってため息をつく。

「……もつ、飽きちゃつたよ」

少女は血の色をしたルビーを嵌め込んだティアラを外すと、化粧台の引き出しにしまった。

こんな無意味な問いかけを続けるのは、もう飽き飽きた。
答えてくれる者など、誰もいないというのに。

「おやすみ、シェリア」

少女は鏡に映る自分に手を振ると、天蓋の付いたベッドへ歩いた。
わたしは今日も夢を見ることはないだろう。

鏡の中の『シェリア・ローズ・ブラッドリー』が笑っていたから。
彼女が笑顔なら、鏡の外の自分が本当に笑える日はやって来ない
のだ。

それは決して諦めなどではなく、冷静な分析から導かれる現実そ
のものだった。

【2】

国境を流れる河を渡ると、見慣れた景色が目に映った。

とはいって、それは少年の記憶にある風景とはだいぶ変わつてはい
たのだが。

「まあ、六年も経てば無理もないな……」

並んで歩く馬の手綱を引きながら、少年は独り言ちた。

「ん？ 何か言つたか、アレク？」

馬上から少年に声がかかった。立派な毛並みの白馬に跨がっている
のは、これまた立派な衣服に身を包んだ若者だ。降り積もつた雪
のような見事な銀髪をしている。

馬上の若者とは対照的に、並んで歩く少年の髪は赤い色をしてい
た。紅白をめでたい組み合わせとする風習は彼らがやつて来た方向、
河よりも手前にのみある文化だ。河を渡つてしまえば、この奇妙な
頭髪の対比もさほど人の目を引くことはない。

「あ、いえ……僕がいたときと比べると、この辺りの様子もだいぶ
変わつっていたので」

アレクと呼ばれた少年は正直に感じたことを答えた。頭上の若者に嘘が通じないことはよく知っている。

「まあそうだろうな。あれからもう何年だ？」

「六年だったと思います」

「嘘つけ。正確な年月も覚えてるだろ？」

「……六年と四ヶ月です」

「この人にはかなわないな」とアレクは笑った。

まるで頭の中をすべて覗かれているかのような錯覚を覚えてしまう。

「レオンハルト様は、どうしてこんな些細な嘘も見抜くことができるのでですか？」

「コツがあるんだよ。ちょっとしたことだ」

「…………」

「知りたいか？」

「わかつていて訊いているのでしょうか？」

レオンハルトと呼ばれた馬上の若者は大きな声で笑った。ひとり
きり笑い、それからふと考えるように顎に手を当てた。

「教えてやつてもいいが……その前に、お前のその『レオンハルト
様』というのはどうにかなりんのか？」

「騎士様のお名前に敬称をお付けするのは、小姓として当然のこと
かと」

「お前の場合、本心からそう思つてるから始末に負えないな。たい
ていの奴らは建前はともかく、本音じゃ俺のことは呼び捨てにした
がつてゐるのに」

「それはレオンハルト様がわれわれ下々の者とも親しくお話しくだ
さるからです」

「いや、俺が言つてるのはもつと上のだな……」

レオンハルトは振り返ると、通りてきたばかりの街道を遠い目で
見ながら言った。

「……まあ、あそこに戻ることももうないだろうからいいか」

悲しげで、それなのにどこか清々しさがある不思議な視線だった。
レオンハルトの目の奥にある複雑な感情を読み取つて、アレクは
遠慮がちに訊いた。

「国王様の『』決定をお恨みになつてゐるのですか？」

「まさか。逆だよ、逆。俺をあの狭つ苦しい国から叩き出してくれ
て感謝すらしている」

「この辺りで一番大きな国家を指して狭つ苦しいなどと……」

「狭いさ、あの国は。了見が狭い。あんなふうには俺はならない」
レオンハルトは頬を緩めると、アレクに向かつて言った。

「悪かつたな、俺に付き合わせて。俺にとつては見知らぬ国への大
冒険だが、お前にとつてはただの里帰りだ。と言つても、お前は故
郷を飛び出したくてこっちに来たんだろ？」

「ええ、まあ……」

「嘘か本當かわかりづらい領き方だな、それ

「見分けるコツは何ですか?」

「ああ、わうか。そういえばそれを教えるんだつたな
レオンハルトは頭を搔くと、柔らかな表情になつて言つた。

「観察と推測。言つなれば洞察だな。それに尽くる

「と言つと?」

「お前、さつさき俺の皿を見て、父上を恨んでるかどうか訊いてきた
だろ?」

アレクはとつそに言葉を返すことができず、やや躊躇したあとで
わざかに頷いた。

「なに、遠慮することはない。主の顔色をうかがうのは小姓として
当然だ。そこは開き直つてくれてかまわない

「す、すみません……」

「だから謝ることじやないつて。まあ、それはさておき、お前は俺
が振り返つて後ろを見る動きを観察して、俺が父上を恨んでいるん
じやないかと疑つたわけだ」

「ええと……はい、そうなりますね。たぶん」

「そこまではいい。だが、そこから先が駄目だ」

「そこから先？」

「人を観察しただけでわかることなんてたかが知れているという」とさ。大事なのはその先。自分が持っている情報を組み立てて、相手が何を考えているか推測することだ」

よくわからないといった様子のアレクに、レオンハルトはさらに説明を続けていく。

「俺があの国でどんな扱いを受け、どんな気持ちでいたか……それを考えれば、必ずと答えが出てくるというわけだ。生まれた国にこだわるより、この国でもっと広い世界を見てみたい。と、俺はそんな人間に育つた。あの国でな。今の俺にはそういう考え方しかない。そういう考え方しかできない。俺が見聞きしたのとは違う、別の世界が見てみたいんだ……」

レオンハルトは相変わらず遠い目をして言った。だが今度はその視線は、これから向かおうとしている辺境の小国へと向けられた。

紅玉の国？？それが彼らが向かう国の名だった。

それは見知らぬ国だつた。少なくとも馬上のレオンハルトにとっては。

「お前、何か特別な日に故郷を出てきただろ？」

「えつ？」

唐突な問いかけに、思わずアレクは頭上を見上げた。

見上げた先に、レオンハルトのいたづらっぽい笑みがあった。

「お前が藍玉の国に来たとき。いや、それからずっと一緒に過ごしてきたわかったことだが、どうもお前は思いきった決断というやつができる性格らしい。そんな奴が生まれ育った国を出て余所の国

に移り住むだなんて、よっぽどのことがあつたに違いない。俺でさえ、父上に脅されるまでは決めかねていたんだからな。それなら、その一世一代の大決断の日を覚えていられないわけがない。どうだ、理論的な推測だろう？

「……恐れ入りました」

アレクは心の底から恐縮して頭を下げた。

「何があつたのか、それは訊かないのですか？」

「お前なら、自分が打ち明けたいときに言つてくれるだろうさ。無理に聞こうとは思わない」

理論的な推測だろ？ そしてレオンハルトは、もうこの話は終わりだと言わんばかりに、アレクから馬の手綱を奪つた。上等な白馬が軽く嘶いた。

レオンハルトは自分で手綱を操りながらも、決して馬足を速めようとはしなかつた。横に並んで歩くアレクの歩調に合わせ、巧みに手綱を捌いていった。

二人は石畳の敷き詰められた街道を歩いていった。まだ日は高く、今夜の宿を探す時間ではない。そのせいか一人とも歩みに余裕があった。

今後のこととは、まだ何一つわからない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0816z/>

千年のヒストライズ

2011年12月5日20時47分発行